

ラカンの美学

同志社大学 落合 仁司

カンはシニフィアンの発話と対象 a の享楽を人間に最も根源的な2つの行為と考える。ここにシニフィアンとは、音=聴覚映像のみならず、形と色=視覚映像、感触=触覚映像、味=味覚映像、匂=嗅覚映像を含む感覚映像全般を指し示し、対象 a とは、物体のみならず、他者の身体とその部分を含む小文字の他者全般を指し示す。したがってシニフィアンの発話は、音あるいは形と色の発話、すなわち芸術の生産を含意し、対象 a の享楽は、物体としての芸術作品あるいは他者の身体とその部分としての自然美の享楽、すなわち美の消費を含意する。

シニフィアンを発話し対象 a を享楽する、芸術を生産し美を消費する主体、行為者の存在が想定される。このとき行為者が発話し享楽するシニフィアンと対象 a、芸術作品と自然美を財と呼ぼう。この行為者と財の関係を精査することにより、美学にとって興味深い帰結が導かれる。

ラカンは、財を2次元実射影空間 $P^2(R)$ 、行為者を2次元球面 S^2 による2重被覆 S^2/S^0 で表現し、その関係を明らかにしようと試みた。本論は、ラカンの着想を生かしつつ、より一般的で自然な表現を試みる。

シニフィアンの発話を、発話者を群 G 、発話を群 G の作用 Gx 、シニフィアンを群 G の作用する軌道 $X=Gx$ で表現し、対象 a の享楽を、対象 a を不動点 x 、享楽を固定部分群 H による不動点 x の保存 $Hx=x$ 、享楽者を固定部分群 H で表現する。このときシニフィアンと対象 a を含む財 X は、発話者と享楽者を合わせた行為者 G/H と、同型 $X \cong G/H$ になる。

財と行為者の同型は、任意の財がある1人の行為者に対応し、任意の行為者がある一つの財に対応することを指し示す。すなわち行為者は財として現われる。これは行為者が市場において財として現われる物象化の定義ではなかったか。言うまでもなく物象化はマルクスの提示した概念である。マルクスは財が市場化することによってそれを生産し消費する主体は私的になり物として現われると考えた。しかしシニフィアンの発話も対象 a の享楽も、それらが私的であることは自由であることと同義ではなかったか。

本論は、シニフィアンの発話と対象 a の享楽という人間にとって根源的な2つの行為が、必然的に物象化を帰結し、したがって発話と享楽の私的な自由を導き出すことを明らかにした。発話と享楽の私的な自由こそ、認識論でも倫理学でもない美学の存在理由ではないだろうか。